

幼保小の連携に即した音楽関連授業の考察 V

— 異なる年度の学生の音楽意識を通して —

*A Study of Music Tuition from Relation between Kindergarten,
Nursery and Elementary School (V)*
— A Music Consciousness of Student Different Year —

星野 英五 HOSHINO Eigo

(教育学部)

I. 動機

教育学部子ども学科は、大規模な教育機関では難しいといわれている芸術性を基にした個性ある豊かな感性を持った保育・教育者養成を目指している。保育・教育の現場で求められる専門性を身につけるための7つのコースを設置しているが、筆者は「子ども音楽コースゼミ」に所属している。創設者が掲げた「至誠奉仕」と芸術の力を学生の音楽意識の発展に生かすかを捉え、どう学生に還元していくかを再認識する必要がある。

教育学部子ども学科は、短期大学部保育科45年と人間発達学部子ども発達学科の15年の歴史を引き継ぎ、2025年度で4年目を迎えている。創設者水野とし子先生の教育者としての体験から、人間の成長における幼児教育の重要性を痛感し、理想とする幼児教育施設を創設して、短期大学保育科を経て現在の芸術大学教育学部に至っている。

現在の急激な保育・教育者希望の学生の減少、そして出生率の益々の低下、あいつぐ教員の不幸事が発生し教育界の危機とも捉えられる時代、これ乗り越えるために前述した芸術性を基にした個性ある豊かな感性を持った学生を育て、社会に貢献できることを目指したい。

幼児期・児童期の音楽教育は、日本の文化や社会の中で育つ子どもの音楽的素地を乳幼児期から児童期への発達の連続性を見据えて、いかに子どもの音楽性を育むことができるかが問われる。

現代は、激動・不確実性・複雑性の時代であるとも言われ、保育・教育現場においても、最近の情報技術は絶え間なく進化し、人工知能 AI を始めとする普及は目覚ましい。工夫すれば、幼い子どもたちでも多様な音楽を聴くことや演奏に参加することも可能になっている。そのため、感性と創造性を高めるための音楽教育に対して、誰もが一度は自問したことがあるはずである。

このような時代にあって、学生や保育・教育者が、子どもに対して教育実践をするためには、「温故知新」という言葉があるように元来の教育をもう一度顧みて、現代の IT 全盛時代に備えていく必要がある。その旨、極論をいえば人工知能 AI に頼り切った子どもを作り出す危険があると言っても過言ではない。

多感な時期にパンデミックの時期を経験し、オンライン授業を受けてきた学生に対して、真の音楽教育を見据え、芸大の中の教育学部の特徴を活かした「芸術・音楽」が持つ力を模索する音楽関係の授業が必要であろう。

本研究は、1年次「音楽」での授業で異なる年度で共通した質問紙を通して、「望ましい幼保小の音楽活動の連携方法の自由記述」「幼児期のプログラミング教育の準備の自由記述」「音楽的保育・教育観」「音楽的保育者・教育観者」について比較検討するものである。

今までの研究から、保育者は小学校の教育と保育は全く別のものと考え、個別の保育方針を持つ園も多く、音楽教育にかなりの差があることが否めないことが分かった(星野, 2021)。学生は、音楽を大切にしながらICTをいかに有効に使う意識を持っていることが分かった(星野, 2023)。

今後の幼保小連携の音楽教育の鍵になる幼稚園等施設の中には、社会の変化等に対応していこうとする意識が必ずしも充分になく、家庭・地域社会あるいは小学校等との連携を密にすることや家庭への支援に充分に取り組まなかったものもあったのではなかろうか。

着々と変化する授業環境の中で学習してきている異なる学年の学生の音楽意識を比較し、乳幼児・学童期の子どもの変化に対応できる、芸大教育学部学生の音楽教育授業への向上に結びつけるものである。

II. 研究方法

対象：2023年度1年次「教科音楽」履修学生42名（以下A群とする）

2024年度1年次「教科音楽」履修学生41名（以下B群とする）

時期：A群「教科音楽」（必修）授業内2023年7月

B群「教科音楽」（必修）授業内2024年7月

方法：授業時間内における一斉による質問紙調査

III. 研究内容と考察

(1) 年長後半と小学校前半の音楽の連携方法

表1 望ましい幼保小の音楽活動の連携方法（自由記述）

<p>【A群】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小学校低学年で年長児で経験した楽しい音楽活動を行い発展向上させる（8） ・合唱のやり方に工夫が必要だと思う（4） ・鍵盤ハーモニカの指導の工夫が必要である（3） ・例えばわらべ歌など楽しめるのびのびとした活動が必要である（2） ・楽器や体を使って楽しく行う活動（2）
<p>【B群】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・合唱指導等歌うことを幼少時から充実させる（8）

- ・小学校低学年で年長児で経験した音楽活動を行い発展向上させる（2）
- ・歌や合奏など集団活動の音楽を行う（2）
- ・色々な音楽や楽器に触れておく（4）
- ・楽器や体を使って楽しく行う活動（1）

表1は、年長後半クラスと小1前半クラスの音楽活動の連携方法を「A群」「B群」に分けて主な自由記述をまとめたものである。

A群では「小学校低学年で年長児で経験した音楽活動を行い発展向上させる」「合唱のやり方に工夫が必要だと思う」「鍵盤ハーモニカの指導の工夫が必要だと思う」「例えばわらべ歌など楽しめるのびのびとした活動」「楽器や体を使って楽しく行う活動」といった小学校への連携の漠然とした幼小連携のイメージを持つ記述が多い。

B群では、「合唱指導等幼児期から歌うことを充実させる」「小学校低学年で年長児で経験した音楽活動を行い発展向上させる」「歌や合奏など集団活動の音楽を行う」「色々な音楽や楽器に触れておく」「楽器や体を使って楽しく行う活動」といった具体的な内容の記述が多くなってきている。

年代によって自由記述の内容が当然違うであろうが、幼保小連携には、小学校にあがる前にどんな音楽活動であり、子どもの将来を考えて行う指導ができる保育・教育者が望まれることを学生の記述から見えてくる。就学前教育において、お互いに他者を認め合って、共に何かを達成するという社会性や人間関係を構築することが、子どもの音楽活動の中で重要であり、学生たちにこのことを気づかせるきっかけを作りたい。例をあげるなら、幼児教育においてオノマトペ遊びを行い感じることや創造性を伸ばし語彙力や話す力を伸ばし、小学校低学年において「ねこのなきごえであそぼう」「おもちゃのチャチャチャ」で生活や社会の中の音や音楽との関連性を考えた活動を行っていきたい。

(2) 幼児期の音楽プログラミング教育導入の準備

表2 幼児期のプログラミング教育の準備（自由記述）

<p>【A群】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・様々な音やリズムを使って作曲を試みる（12） ・音やリズムが分かるように準備として使う（4） ・幼少時から少しずつパソコンになれる程度に行う（3） ・イラスト等視覚的にも楽しめる方法を取り入れる（3） ・ピアノを使わなくて良いような利用方法を考える（2） ・音楽活動の録音や録画に使う（2） ・曲のイメージが分かるような視覚教材として使う（2）
<p>【B群】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・様々な音やリズムを使って作曲を試みる（15） ・幼少時から少しずつパソコンになれる程度に行う（6） ・音やリズムが分かるように準備として使う（4）

- ・音楽が好きになるように使う (2)
- ・幼少時から少しずつパソコンに慣れる程度に行う (2)
- ・劇などの練習で利用し音楽の向上として使う (2)

表2は、音楽でプログラミング教育を導入するとしたらどのような形が望ましいかを「A群」「B群」に分けて主な自由記述をまとめたものである。

両群とも「様々な音やリズムを使って作曲をしてみる」「幼少時から少しずつパソコンに慣れる程度に行う」等導入段階の記述が多い。実際的な子どもの動きを想像しながらの記述が多く、リモート授業などを経験してきた学生の実体験を基に幼児期のプログラミング教育の学生らしい導入方法が目立つ。

日々変化していく音楽教育の実態を理解し、いかに学生に分りやすくプログラミング教育導入を理解させることが課題の一つになっている。

既に高校時代にプログラミング教育の経験のある学生も多く、音楽におけるプログラミング教育がどのようなものかを、ある程度理解する力を持っているのであろう。教育の本質を正しく理解することができるように、大学の授業の中で新しい音楽の授業形態がより分かる方法を、さらに模索していかなくてはならない。

筆者は25年前から附属クリエ幼稚園で保育の一環として試行的にコンピュータ音楽活動を始め、15年前から愛知教育大学附属岡崎小学校において低学年から高学年へと学年を経て現在も活動を継続している。文部科学省はSociety5.0時代を生きる子どもたちに相応しい全ての子どもたちの可能性を引き出す個別最適な学びと協働的な学びを実現するため「一人一台端末」と学校における高速通信ネットワークを整備すると言っている。音楽活動にそのままプログラミング教育を取り入れる目的ではなく、発達や学びの連続性を踏まえた幼保小連携を実践し、まずは子どもたちの非認知的能力を伸ばすことが目的であることを学生に理解させたいと考える。

(3) 大学の授業で重視した方がよいこと

表3 大学の授業で重視したいもの

A群	保育者養成	小学校教員養成
1. 音程やリズムに気をつけて歌える	23名 (54.8%)	24名 (57.1%)
2. 歌詞を理解し子どもたちの心を育てる説明ができる	18名 (42.9%)	< 29名 (69.0%)
3. 唱歌や童謡が歌える	30名 (71.4%)	26名 (61.9%)
4. 伝統的なわらべ歌で遊ぶ	30名 (71.4%)	> 19名 (45.2%)
5. ピアノやエレクトーンの演奏技能 (伴奏) を高める	22名 (52.4%)	> 10名 (23.8%)
6. 生活習慣 (手洗い・歯磨き等) を身につける歌を知る	37名 (88.1%)	> 18名 (42.9%)
7. 音楽理論が分かる	4名 (9.5%)	< 16名 (38.1%)
8. プログラミング教育をにらんでICTを活用できる	4名 (9.5%)	< 22名 (52.4%)
B群	保育者養成	小学校教員養成

1. 音程リズムに気をつけて歌える	26名 (63.4%)		26名 (63.4%)
2. 歌詞を理解し子どもたちの心を育てる説明ができる	27名 (65.9%)		28名 (68.3%)
3. 唱歌や童謡が歌える	28名 (68.3%)		23名 (56.1%)
4. 伝統的なわらべ歌で遊ぶ	29名 (70.7%)	>	20名 (48.8%)
5. ピアノやエレクトーンの演奏技能(伴奏)を高める	23名 (56.1%)	>	15名 (36.6%)
6. 生活習慣(手洗い・歯磨き等)を身につける歌を知る	26名 (87.8%)	>	29名 (70.7%)
7. 音楽理論が分かる	13名 (31.7%)	<	22名 (53.7%)
8. プログラミング教育をにらんでICTを活用できる	15名 (36.6%)	<	28名 (68.3%)

表3は、大学の授業で重視した方がよいことを「A群」「B群」に分けて『非常に重要だと思う』『やや重要だと思う』『あまり重要だと思わない』『全く重要だと思わない』の4段階評定の内、『非常に重要だと思う』と回答したものである。

A群では「4. 伝統的なわらべ歌で遊ぶ」「5. ピアノやエレクトーンの演奏技能(伴奏)を高める」「6. 生活習慣(手洗い・歯磨き等)を身につける歌を知る」で教員養成より保育養成で高く($ps<.05$)、「2. 歌詞を理解し子どもたちの心を育てる説明ができる」「7. 音楽理論が分かる」「8. プログラミング教育をにらんでICTを活用できる」が保育者養成より小学校教員養成で高い($ps<.05$)。

B群では、「4. 伝統的なわらべ歌で遊ぶ」「5. ピアノやエレクトーンの演奏技能(伴奏)を高める」「6. 生活習慣(手洗い・歯磨き等)を身につけるため歌を知る」で小学校教員養成より保育者養成で高く($ps<.05$)、「7. 音楽理論が分かる」「8. プログラミング教育をにらんでICTを活用できる」が保育者養成より小学校教育で高い($ps<.05$)。

保育者養成と小学校教員養成の違いを認識する傾向は、両群とも伝統的なわらべ歌遊びや歌の伴奏技能や歌での生活習慣意識を高める意識が小学校教員養成で低く、音楽理論やICT教育で高い。両者とも基本的に考え方は同じではあるが、A群が「歌の歌詞を理解し子どもの心を育てる説明ができる」で小学校で重視しているのは学習指導要領を理解している現れである。僅か一年の違いでB群はA群と比較して、プログラミング教育をにらんでICTの活用することを、小学校ほど意識は高くはないが、保育者養成においても重視すべきであると認識がより強くなってきている($p<.05$)。年代を追って、幼児教育においてもICT教育の導入が高くなっている。保育者養成においても音楽教育の土台を子どもたちに教える意識をより高め、さらにICT教育に発展することが望ましい。音楽教育の土台は日本に生活している子どもたちに合った、わらべ歌や生活の中の歌を大切に大学授業を発展させていきたい。

(4) 音楽的保育観・教育観

表4 音楽的保育観・教育観

A群	保育(保・幼)	教育(小学校)
1. 楽しく音楽に関わり音楽に興味・関心を持たせる	31名 (73.8%)	30名 (71.4%)

2. 歩く走るスキップなどリズムカルな動きを楽しむ	35名 (83.3%)	>	25名 (59.5%)
3. 音楽的リズム活動は子どもの心身の発達に大きく影響する	32名 (76.2%)		29名 (69.0%)
4. 歌詞を理解し子どもたちの心を育てるようにする	20名 (47.6%)	<	30名 (71.4%)
5. 子どもの生活の中でよく耳にする音や音楽との関わりを大切にする	32名 (76.2%)		30名 (71.4%)
6. おだやかなメロディーは優しさや思いやりを育む	28名 (66.7%)		26名 (61.9%)
7. 楽しさ活発さ静かさ優美さなど曲の感じが分るようにする	25名 (59.5%)		29名 (69.0%)
8. 様々なジャンルの歌を子どもに歌わせる	26名 (61.9%)		29名 (69.0%)
9. 唱歌や童謡を歌えるようにする	33名 (78.6%)		30名 (71.4%)
10. CDなどの音響機器は音質の良いものを選ぶ	19名 (45.2%)		24名 (57.1%)
11. 音楽環境が子どもの心理状態に影響する	30名 (71.4%)		31名 (73.8%)
12. 伝統的なわらべ歌遊びは日常的に取り入れるようにする	26名 (61.9%)	>	17名 (40.5%)
13. 生活習慣(手洗い・歯磨き等)を身につけさせる歌を教えることができる	34名 (81.0%)	>	21名 (50.0%)
14. 英語の歌を子どもたちに歌わせる	7名 (16.7%)	<	24名 (57.1%)
15. プログラミング教育をにらんでICTを活用する	5名 (11.9%)	<	24名 (57.1%)
B群			
	保育(保・幼)		教育(小学校)
1. 楽しく音楽に関わり音楽に興味・関心をもたせる	32名 (78.0%)		29名 (70.7%)
2. 歩く走るスキップなどリズムカルな動きを楽しむ	29名 (70.7%)		31名 (75.9%)
3. 音楽的リズム活動は子どもの心身の発達に大きく影響する	32名 (78.0%)		31名 (75.6%)
4. 歌詞を理解し子どもたちの心を育てるようにする	27名 (65.9%)	<	33名 (80.5%)
5. 子どもの生活の中でよく耳にする音や音楽との関わりを大切にする	30名 (73.2%)		34名 (82.9%)
6. おだやかなメロディーは優しさや思いやりを育む	32名 (78.0%)		33名 (80.5%)
7. 楽しさ活発さ静かさ優美さなど曲の感じが分るようにする	24名 (58.5%)	<	31名 (75.6%)
8. 様々なジャンルの歌を子どもに歌わせる	27名 (65.9%)		29名 (70.7%)
9. 唱歌や童謡を歌えるようにする	32名 (78.0%)		27名 (65.9%)
10. CDなどの音響機器は音質の良いものを選ぶ	24名 (58.5%)		24名 (58.5%)
11. 音楽環境が子どもの心理状態に影響する	27名 (65.9%)		25名 (61.0%)
12. 伝統的なわらべ歌遊びは日常的に取り入れるようにする	27名 (65.9%)	>	19名 (46.3%)
13. 生活習慣(手洗い・歯磨き等)を身につけさせる歌を教えることができる	34名 (82.9%)	>	26名 (63.4%)
14. 英語の歌を子どもたちに歌わせる	14名 (34.1%)	<	24名 (58.5%)
15. プログラミング教育をにらんでICTを活用する	14名 (34.1%)	<	27名 (65.9%)

表4は、音楽的保育・教育観を「A群」「B群」に分けて『非常に重要だと思う』『やや重要だと思う』『あまり重要だと思わない』『全く重要だと思わない』の4段階評定の内、『非常に重要だと思う』と回答したものである。

A群では「2. 歩く走るスキップなどリズムカルな動きを楽しむ」「12. 伝統的なわらべ歌遊びは日常的に取り入れるようにする」「13. 生活習慣を身につけさせる歌を教えることができる」で小学校教育より保育で高く (ps<.05)、「4. 歌詞を理解し子どもたちの心を育てるようにする」「14. 英語の歌を子どもたちに歌わせる」「15. プログラミング教育をにらんで ICT を活用する」が保育より小学校教育で高い (ps<.05)。

B群でもA群と同じ2項目で、「12. 伝統的なわらべ歌遊びは日常的に取り入れるようにする」「13. 生活習慣を身につけさせる歌を教えることができる」が小学校教育より保育で高く (ps<.05)、「4. 歌詞を理解し子どもたちの心を育てるようにする」「7. 楽しさ活発さ静かさ優美さなど曲の感じが分かるようにする」「14. 英語の歌を子どもたちに歌わせる」「15. プログラミング教育をにらんで ICT を活用する」が保育者養成より小学校教育で高い (ps<.05)。

保育・教育観においても保育と小学校の違いを認識する傾向は基本的に同じではあるが、音楽活動において「歌詞を理解し子どもたちの心を育てるようにする」「楽しさ活発さ静かさ優美さなど曲の感じが分かるようにする」をみると、特にB群が小学校教育で子どもの感性を向上させる意識の強さの表れである。わらべうたは子どもが遊びを通して生み出してきたことばと動きと音楽が相互に関連した表現であり、小学校教育では国語や生活や音楽教科に結びつけていくものである。さらに、幼児教育においては生活習慣の向上を心掛け、小学校教育では道徳教育に結びつけていくものである。小学校において「もみじ」「かぼちゃ」「森の探検隊」「わらべ歌遊び」等生活や季節に結びついた環境面や人間関係に関する活動を取り入れ音楽活動を積み上げるための工夫をし、子ども同士のコミュニケーション力や集団性を培いたい。多感な時期にパンデミックを経験した子どもたちに、少しでも音楽を通して子どもたち同士が自信をもって語り関わり合いながら学びを深める、小学校教育に結びつけていく力を学生につけさせていきたい。

そのうえで、現代に見合った外国語活動や ICT 活用の意識に発展させることが望ましいのではないかと考える。

(5) 音楽的保育者観・教育者観

表5 音楽的保育者観・教育者観

A群	保育者(保・幼)	教育者(小学校)
1. 音楽に合わせて体を動かすことができる	34名(81.0%)	28名(68.3%)
2. 子どもの発達に合った音楽指導ができる	33名(78.6%)	33名(80.5%)
3. 子どもに合わせて伴奏ができる(ピアノ・エレクトーンで)	27名(64.3%)	25名(61.0%)
4. 音楽が好きである(歌うことを楽しむ・鑑賞などする等)	21名(50.0%)	24名(58.5%)
5. リズム感がよい	28名(66.7%)	27名(65.9%)

6. 生活の中にある音に耳を傾け音の面白さに気付く	23名 (54.8%)		23名 (56.1%)
7. 歌詞を理解し、子どもたちの心を育てるような説明ができる	24名 (57.1%)	<	34名 (82.9%)
8. 唱歌や童謡を歌えるようにする	32名 (76.2%)	>	25名 (61.0%)
9. 響きのあるきれいな声で歌える	16名 (38.1%)		18名 (43.9%)
10. 音楽指導の中で個々の子どもの音楽的能力を把握できる	20名 (47.6%)	<	29名 (70.7%)
11. 様々なジャンルの歌を子どもに歌わせる	20名 (47.6%)	<	30名 (73.2%)
12. 手・指遊びが上手である	29名 (69.0%)	>	12名 (29.3%)
13. 生活習慣(手洗い・歯磨き等)を身につけさせる歌を教えることができる	34名 (81.0%)	>	19名 (46.3%)
14. 鍵盤楽器(ピアノ・エレクトーン)以外の楽器ができる	11名 (26.2%)		13名 (31.7%)
15. 英語の歌(簡単な)を子どもたちに教えることができる	9名 (21.4%)	<	20名 (48.8%)
16. コンピュータを利用し音楽活動に役立てる能力がある	7名 (16.7%)	<	18名 (43.9%)
B群			
	保育者(保・幼)		教育者(小学校)
1. 音楽に合わせて体を動かすことができる	33名 (78.6%)		29名 (69.0%)
2. 子どもの発達に合った音楽指導ができる	31名 (73.8%)		34名 (81.0%)
3. 子どもに合わせて伴奏ができる(ピアノ・エレクトーンで)	18名 (42.9%)		15名 (35.7%)
4. 音楽が好きである(歌うことを楽しむ・鑑賞などする等)	29名 (69.0%)		31名 (73.8%)
5. リズム感がよい	29名 (69.0%)		29名 (69.0%)
6. 生活の中にある音に耳を傾け音の面白さに気付く	23名 (54.3%)		28名 (66.7%)
7. 歌詞を理解し、子どもたちの心を育てるような説明ができる	26名 (61.9%)		27名 (64.3%)
8. 唱歌や童謡を歌えるようにする	27名 (64.3%)		27名 (64.3%)
9. 響きのあるきれいな声で歌える	20名 (47.6%)		24名 (57.1%)
10. 音楽指導の中で個々の子どもの音楽的能力を把握できる	23名 (54.8%)		26名 (61.9%)
11. 様々なジャンルの歌を子どもに歌わせる	29名 (69.0%)		32名 (76.2%)
12. 手・指遊びが上手である	28名 (66.7%)	>	17名 (40.5%)
13. 生活習慣(手洗い・歯磨き等)を身につけさせる歌を教えることができる	30名 (71.4%)	>	24名 (57.1%)
14. 鍵盤楽器(ピアノ・エレクトーン)以外の楽器ができる	18名 (42.9%)		15名 (35.7%)
15. 英語の歌(簡単な)を子どもたちに教えることができる	20名 (47.6%)	<	27名 (64.3%)
16. コンピュータを利用し音楽活動に役立てる能力がある	14名 (33.3%)	<	21名 (50.0%)

表5は、音楽的保育者・教育者観を「A群」「B群」に分けて『非常に重要だと思う』『やや重要だと思う』『あまり重要だと思わない』『全く重要だと思わない』の4段階評定の内、『非常に重要だと思う』と回答したものである。

A群では「8. 唱歌や童謡を歌えるようにする」「12. 手・指遊びが上手である」「13.

生活習慣（手洗い・歯磨き等）を身につけさせる歌を教えることができる」で小学校教育より保育で高く（ $ps<.05$ ）、「7. 歌詞を理解し、子どもたちの心を育てるような説明ができる」「10. 音楽指導の中で個々の子どもの音楽的能力を把握できることができる」「11. 様々なジャンルの歌を取り入れる」「15. 簡単な英語の歌を子どもたちに教えることができる」「16. コンピュータを利用し音楽活動に役立てる能力がある」が保育より小学校教育で高い（ $ps<.05$ ）。

B群では、「12. 手・指遊びが上手である」「13. 生活習慣を身につける歌を教える」で小学校教育より保育で高く（ $p<.05$ ）、「15. 簡単な英語の歌を子どもたちに教えることができる」「16. コンピュータを利用し音楽活動に役立てる能力がある」が保育より小学校教育で高い（ $ps<.05$ ）。

両群とも手・指遊びや生活習慣の為の歌の教え方は保育者に重視され、小学校教員ではコンピュータを利用した音楽活動や英語の歌を子どもたちに教える外国語活動が重要である意識が強くなっている。

保育者・教育者観においても傾向は両群とも基本的に同じではあるが、A群の方が、国語や道徳教育と結びついた歌詞を理解し心を育てることや、個々の子どもの音楽的能力の把握や様々な音楽ジャンルの歌を歌うことを意識しており、小学校音楽教育の質の向上意欲が強いのであろう。両群とも保育者において生活習慣に結びつけた童謡や、日常の手遊び指遊びの面白さに気付くことの重要度に気づいている。小学校において歌詞を理解し心を育てる説明やコンピュータを利用した音楽活動が重要である意識が強くなっている。ICT教育を既に高校時代に受けてきた学生の意識の表れであろう。A群の方が保育に対して基本的な素養や感性の向上意識が求められ、小学校教員は高度な素養や能力が必要になるという意識がある。どの年齢においても心を育てる教育や非認知的能力向上が音楽の指導の根底にあることを学生たちに丁寧に説明しなくてはいけない注意点であろう。

激動する社会を生きていかななくてはならない子どもたちの心の根底に残すような音楽指導者を養成していきたい。

IV. まとめ

子どもが行う音楽活動を「こうするのよ」とか、うまい下手を言ったりするのではなく、まず子どもの声に耳を傾け、子どものことをよく観ることを重視することは保育・教育の基本である。音楽環境において近年のストリーミング等音楽環境が目覚ましく変化し、様々な音楽が乳幼児の世界でも簡単に手に入る。さらに生成AIを始めとする新たな音楽環境が子どもの世界にも影響し、子どもたちが何を学ぶのか体験していくのか明確な答えを出すことが難しい時代に入ってきている。生成AIは新しい価値の創造など大きな可能性がある一方、リスクもある。生成AIが作ったものに誤りが含まれていたり、著作権のあるデータを使用したりする懸念は払拭できない。あくまでも人間を補助する役割と

して、最終的な判断と責任は人間が担うものであり、このことを保育・教育者は現代の子どもにかみ砕いてあらゆる手段を取りながら教えていくことが必要である。

「小学校低学年で年長児で経験した楽しい音楽活動を行い発展向上させる（表1）」の自由記述のように、学生は音楽の基礎は幼少時に行い小学校からはその基盤をさらに発展させるという意識がある。就学前教育に課せられた大きな課題は、すべての子どもが安心して集い、それぞれの感性を十分に発達させることのできる環境と活動を提供することである。「様々な音やリズムを使って作曲をしてみる（表2）」の自由記述のように、音楽を大切にしながらICTをいかに有効に使うことが今後の幼保小連携の音楽教育の鍵になるであろう。直接体験を大切にする幼稚園・保育所・こども園でもICT導入を現実のものと発展させる必要があると考える。

不透明さを増す国際情勢の中、益々先の見えない目まぐるしい社会情勢の変化と価値観の多様化による混迷が続いている。問題を発見し解決する力がこれからの社会を生きていく子どもたちに求められる。

幼児は、身体感覚を伴う多様な活動を経験することによって、豊かな感性を養うとともに、生涯にわたる学習意欲や学習態度の基礎となる好奇心や探究心を培うものである。このような特質を有する幼児教育は、小学校以降の教育と比較して「見えない教育」と言われることもあるが、幼児教育に関わるにあたり、家庭や地域社会では、幼児の持つ良さや幼児の可能性の芽を伸ばす努力が、保育・教育者に求められる。また、小学校以降における教科の内容については、実感を伴って深く理解できることにつながる「学習の芽生えや道徳性」を育むことをより一層大切にしたい。

幼稚園等施設における保育者には、幼児一人一人の内面にひそむ芽生えを理解し、その芽を引き出し伸ばすために、幼児の主體的な活動を促す適当な環境を計画的に設定していくことが重要である。幼児の発達や生活には、家庭・地域社会・幼稚園等施設の中での連続性があるにもかかわらず、幼児教育において三者の連携や補完が必ずしも十分ではない。

小学校教員は、小学校学習指導要領の共通事項をよく読み取り、音楽を楽しむところまでいく目的をもって子どもの指導ができるような力が必要になってくると考える。

教育学部子ども学科は、創設者の建学の精神にのっとり、滝子幼稚園から始まった幼稚園・保育所・子ども園そして小学校教員養成へと中部圏唯一の総合芸術大学らしい特徴を出し、さらに一歩進んだ真に子どもの幸せを考える保育・教育者を育成することを目的とするのが望ましいと考える。

2025年度から1年次「音楽」の授業は、小学校教諭のみ必修科目になっているが、子どもの乳児期から児童期までの幅広い発達段階の特徴を映像を交えて、保育所保育指針・幼稚園教育要領・教育保育要領・小学校学習指導要領に関連づけて説明することが必要である。さらに2年次「小学校音楽指導法」の授業では、現代の子どもたちが、音楽に対し

て興味を持ち楽しめ、音楽のもつ諸要素を全身で楽しく感じられるような授業を学生一人ひとりが独自に計画できるように指導したい。

小学校では不登校児童の増加が騒がれている。現代の時代に即した子どもたちに寄り添える音楽を提供できる保育・教育者を養成し、敏感期にパンデミックを経験した学生たちに、心を大切に育てる創造的思考力や人間関係を育てる音楽教育を重視できるようにしていきたい。

追記

本調査は名古屋芸術大学研究倫理委員会の承認を受けて実施しているものである。

引用文献

- 1) 星野英五2019「幼保小の連携に即した音楽関連授業の考察Ⅱ—学生と保育者の音楽意識の比較から—」名古屋芸術大学研究紀要 第40巻 pp. 265-273
- 2) 星野英五2021「幼保小の連携に即した音楽関連授業の考察Ⅲ—保育者の音楽意識を通して—」名古屋芸術大学研究紀要 第42巻 pp. 297-306
- 3) 星野英五2022「学生の音楽意識Ⅳ」日本保育学会第75回大会 聖徳大学
- 4) 星野英五2023「幼保小の連携に即した音楽関連授業の考察Ⅳ—異なる学年の学生の音楽意識を通して—」名古屋芸術大学研究紀要 第45巻 pp. 231-240
- 5) 星野英五2025「子どものコンピュータ音楽活動—小学校児童の過去15年間の変化—」日本音楽教育学会第56回大会（長崎大会） p. 134

参考文献

- 1) 小学校学習指導要領解説（平成29年告示）解説音楽編 文部科学省
- 2) 文部科学省中央審議会（2005）子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育のあり方について（答申）
- 3) 「子どもの音楽的素地を育むために」岡林典子 著 一藝社
- 4) 「可能性の育み芸術士アーティストと子どもたち15年のあゆみ」ミネルヴァ書房
- 5) 「小学音楽 おんがくのおくりもの1～6」教育出版
- 6) 「学生のおんがく 1～6」教育芸術社

質問紙

I. あなたの免許・資格取得と就職について

- ① あなたはどの資格・免許を取得希望しますか。数字に○をつけて下さい（複数回答可）。
1. 小学校教諭免許 2. 幼稚園教諭免許 3. その他（ ）
- ② あなたの就職希望は、現在、どれにあてはまりますか。数字に○をつけて下さい（複数回答可）。
1. 小学校 2. 幼稚園 3. その他（ ）

II. 子どもの幼稚園・保育園時代と小学校の音楽活動の考え方について

- ① 幼保小連携で大事なことの1つは、年長クラスの後半と小1クラスの前半でつながりのあったカリキュラムを作ることと言われています。音楽活動ではどんな方法が望ましいと考えられると思いますか。
- ② 子どもの幼稚園・保育園時代の音楽活動と小学校の音楽活動はどのように違うと考えますか。
- ③ 小学校において2020年からプログラミング教育が導入されます。音楽でプログラミング教育を導入するとしたらどのような形が望ましいと思いますか。また、それに向かい幼児期にはどのような準備が必要だと思いますか。

III. 保育者養成（保・幼）・教育者養成（小学校）の大学の授業について

教育者・保育者にとって音楽活動をする上で、以下の項目をどの程度重視した方がよいと思いますか。4「非常に重要だと思う」、3「やや重要だと思う」、2「あまり重要だと思わない」、1「全く重要だと思わない」の中から保育者（幼・保）教育者（小学校）に分け1つずつ選んで○をつけて下さい。(1)ピアノやエレクトーンの演奏技能（伴奏）を高める (2)音程やリズムに気をつけて歌える (3)歌詞を理解し、子どもたちの心を育てるような説明ができる (4)伝統的なわらべ歌で遊ぶ (5)音楽理論が分かる (6)唱歌や童謡を歌える (7)生活習慣（手洗い・歯磨き等）を身につける歌を知る (8)プログラミング教育をにらんでICTを活用できる

IV. 教育・保育について

あなたの考えている教育・保育に、次の項目はどの程度あてはまると思いますか。または必要だと思いますか。4「非常に思う」、3「やや思う」、2「あまり思わない」、1「全く思わない」の中から保育者（幼・保）教育者（小学校）に分け1つずつ選んで○をつけて下さい。

(1)音楽的リズム活動は子どもの心身の発達に大きく影響する (2)楽しく音楽に関わり音楽に興味・関心を持たせる (3)音楽環境が子どもの心理状態に影響する (4)様々なジャンルの歌を子どもに歌わせる (5)おだやかなメロディーは優しさや思いやりを育くむ (6)伝統的なわらべ歌遊びは日常的に取り入れるようにする (7)生活習慣(手洗い・歯磨き等)を身につけさせる歌を取り入れることができる

- (1)歌詞を理解し子どもたちの心を育てるようにする
- (2)唱歌や童謡を歌えるようにする
- (3)歩く走るスキップなどリズムカルな動きを楽しむ
- (4)子どもの生活の中でよく耳にする音や音楽との関わりを大切にする
- (5)CDなどの音響機器は音質のよいものを選ぶ
- (6)楽しさ活発さ静かさ優美さなど曲の感じが分かるようにする
- (7)プログラミング教育をにらんでICTを活用する
- (8)英語の歌を子どもたちに歌わせる

V. 保育所・幼稚園・小学校の先生のあり方について(あなたの勤務先に関わらず両方答えて下さい)。

あなたは、保育所・幼稚園・小学校の先生について、次の項目はどの程度必要であると思いますか。

- (1)音楽が好きである(歌うことを楽しむ・鑑賞などする等)
- (2)生活の中にある音に耳を傾け音の面白さに気付く
- (3)英語の歌(簡単な)を子どもたちに教えることができる
- (4)様々なジャンルの歌を子どもに歌わせる
- (5)音楽指導の中で個々の子どもの音楽的能力を把握できる
- (6)生活習慣(手洗い・歯磨き等)を身につけさせる歌を教えることができる
- (7)子どもの発達に合った音楽指導ができる
- (8)歌詞を理解し、子どもたちの心を育てるような説明ができる
- (9)唱歌や童謡を歌えるようにする
- (10)響きのあるきれいな声で歌える
- (11)鍵盤楽器(ピアノ・エレクトーン)以外の楽器ができる
- (12)手・指遊びが上手である
- (13)リズム感がよい
- (14)子どもに合わせて伴奏ができる(ピアノ・エレクトーンで)
- (15)音楽に合わせて体を動かすことができる
- (16)コンピュータを利用し音楽活動に役立てる能力がある

どうもありがとうございました。